

「国際男性デー」〜生きづらい社会の枠組み〜

「国際男性デー」は男性の健康や生き方に目を向け、ジェンダー平等を促進することを目的として1999年に始まり、11月19日に設定されています。しかし日本では、3月8日の「国際女性デー」に比べると認知度や盛り上がりはいまひとつです。その理由として「ジェンダー問題は女性問題であるという見方が支配的で、男性の問題でもあるという見方が浸透していないこと」があります。ジェンダー問題が男性にとって「自分ごと」になっていません。女性が「女らしさ」や「女性はこうあるべき」という価値観で縛られ、選択肢を狭められている状況は、裏を返せば男性も「男らしさ」を求められ「男はかくあるべき」という枠をはめられているということです。ジェンダーに関する男女の生きづらさはコインの裏表であり、問題の根っこは同じです。

【生きづらい】

2020年の日本の自死者数は2万1,081人ですが、そのうち1万4,055人は男性で女性の2倍です。男性の自死者の多さは「生きづらさ」を象徴するデータだと言えます。また男性は、仕事において女性よりストレスを感じる傾向が強く、ストレスを相談できる人も少ないという厚生労働省の調査もあります。別の調査では、「男だから」とい

う固定観念やプレッシャーにより、生きづらさや不便さを感じると答えた人は51%にのぼりました。年代別にみると、20〜40代が50%を超えていて、若い世代ほど男性ならではの生きづらさを多く抱えています。今の社会の枠組みの中で生きづらさを抱えている人が、そこから外れて「自分は自分だと考える」ところは、敗者を意味することになるので大変難しい選択になる現実があります。

【男いつかの呪縛】

- ①デートで男性がお金を多く負担する、女性をリードするべきなどという風潮。
- ②男が弱音を吐く、悩みを打ち明けることなどは恥ずかしいという考え方。
- ③男は定年までフルタイム・正社員で働くべきだ。
- ④力仕事や危険な仕事は男がするべきだ。
- ⑤一家の大黒柱でいなければならない。

【生きづらさの帰結】

男性の生きづらさは、自死者の多さとともに「不健康や短命」に直結しています。例えば、「男らしさ」の規範が過度な飲酒や喫煙に伴う疾病をもたらしています。特に飲酒は「男らしさ」の文化的象徴にさえなっていて、生活習慣病と密接な関係があります。男性の喫煙率は27・1%なのに対し、女性は7.6%に

留まっています。また、「男らしい」規範に適合することは、うつ病など様々な男性の健康リスクを増加させており、精神的・身体的負担は非常に大きいといえます。

【ふたれづらさのか〜】

こうした生きづらさに直面した場合はどうしたらいいのでしょうか。最も大きなポイントには、ジェンダー不平等を解消することです。男性の生きづらさは、家父長制のなごりや男性優位社会と密接な関係にあり、社会問題になっているジェンダー不平等の問題に取り組むことはすべての人の「生きやすさ」に繋がっていきます。しかし、社会の構造はそう簡単には変わりません。欧米諸国が何十年もかけて人権意識を改革してジェンダー不平等を解消してきたように、私たちも人権を学び続けることが大切です。そして、子どもや孫に「誰もが生きやすい社会」を残したいものです。

